

端溪硯石産地の地質と古文献「懷瑞統硯譜」

鈴木 舜 一*

Geology of the Tankei (Duanxi) Inkstone and Ancient Document on the History of the Quarries

Shunichi SUZUKI *

Key words : inkstone, Tankei (Duanxi) Inkstone, Huai Rui's book of inkstone

キーワード : 硯, 端溪石, 懷瑞統硯譜

I. はじめに

中国四大名硯の首位にある端溪硯の歴史は、唐の武徳年間(618-626)に始まり、1400年近く文人墨客に愛用されている。広東省地質鉱産局は、この優れた硯石資源を確保するため、1982～1983年に地質調査を実施し、硯石の分布・産出状態、鉱物組成・組織の特徴などを明らかにしており、その後も5万分の1地質図幅調査を行っている。これらの報告書は未公開であるが、その内容が中国の硯の本に2,3紹介されており、さらに一部が論文として公表されている。わが国でも端溪硯に関心をもつ人が多いので、これらに基づいて地質学・鉱物学からみた端溪硯石の特質を紹介し、併せて、最近発見した端溪硯坑開採史に関する注目すべき資料について述べる。

II. 端溪硯石の産地

端溪硯石の産地は広東省肇慶市にある。肇慶市街の東の爛柯山(斧柯山)から北の北嶺にかけて産する硯石を端溪石と呼ぶのは、同地の西江を古くは端溪とも称したからである。また、肇慶の古名端州に因んで端石とも呼ばれている。爛柯山の西北麓で西江に流れこむ小溪流を端溪と称するよ

うになったのは、清初からである。なお、肇慶市西部の徳慶県にも、西江の支流に同名の端溪がある。

爛柯山は、東西約25km、南北10～4kmの孤立した山地で、その南、北および東側は西江の沖積平野にかこまれており、西側は羚羊峽をはさんで竜門山(高峽山)と対している(図1)。竜門山は、羚羊峽の形成によって生じた貫通丘で、旧河道はその西側にある。また爛柯山全体も竜門山が離れる前に生じた貫通丘で、その時代の旧河道は爛柯山の南側を通っている。

5万分の1地形図(陸地測量部昭和13年,1938発行)を見ると、爛柯山は標高523m、爛柯頂は約860mである。この地形図は、民国27年(1938)刊の高要県志の地形図とよく似ており、同じ原図に測量データを追加して製図したものとされる。

端溪硯が、わが国にいつ初めて渡来したのかは不明である。江戸時代に入ってその真価が次第に知られるようになったが、その所有者は大名、富豪、文人墨客などごく一部の人に限られていた。文人墨客で、端溪硯の愛好家として有名な頼山陽の詩集には、数篇の端溪硯の詩がある。明治時代には、小説(たとえば漱石の「坊っちゃん」)「草

* 東北大学名誉教授

* Professor Emeritus of Tohoku University

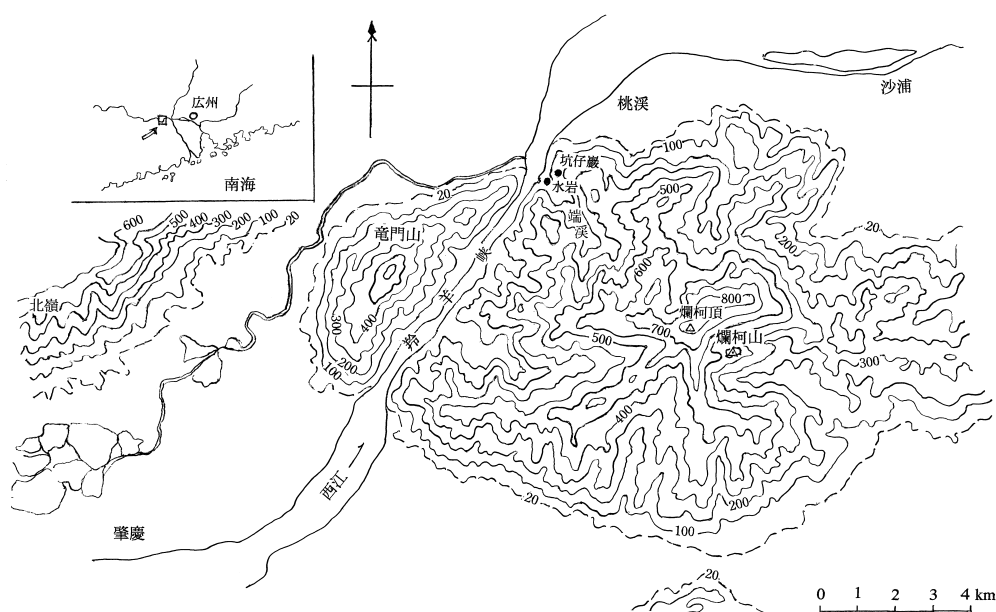


図 1 端溪硯石産地の略図。

枕」)や随筆に端溪硯が登場し、端溪硯の名は一般の人々にも広く知られるようになった。1960年代から端溪硯の輸入が大きく伸びて、現在では大抵の硯店の陳列棚に飾られている。

III. 端溪硯石産地の地質

これまでわが国では、端溪硯石の岩質について断片的知識しかなかったが、明治初期には白野(1886)が粘板岩と記述し、その後篠本(1916)は輝緑凝灰岩としている。飯島(1935)は東亜地質図(東京地学協会発行)を見て、硯石の地質時代をシルリア・カンブリア紀としている。

近年、広東省地質鉱産局は端溪硯石の賦存地域の地質調査を実施し、地質調査報告(1985)をまとめている。この報告書は公開されていないが、陳振中(1991)と劉演良(1988, 1994)はその概要を紹介している。また、季明鈞(1990)と凌井生(1996)は層序と岩質に関する論文を発表しており、葉爾康(1991)は硯石の鉱物組成を論じている。

1) 層序

本地域には、中部～上部デボン系が、カンブリ

ア系・オルドビス系を不整合に覆って広く分布し、北東東～東西方向の軸をもって褶曲している。硯石層は、中部デボン系老虎頭層の中部にあたる老坑部層には含まれている。老坑部層の厚さは283 mで、7つの堆積サイクルからなっている。1サイクルの厚さは、25～50 mで、砂岩・シルト岩・砂質頁岩・頁岩からなり、最上部の泥質岩は紫色を呈する。硯石層は、第1, 5, 6, 7の各サイクル最上部の凝灰質砂質頁岩～凝灰質頁岩中にレンズ状～薄層状をなしてはさまれ、一般に厚さ0.3～1.5 mで、側方変化が著しく、膨縮尖滅する。

2) 硯石の鉱物組成と組織の特徴

本地域の層序に関する文献では、硯石を頁岩として記載しているものが多いが、葉爾康(1991)によれば、泥質岩が軽度の変成作用(変成の時期は三疊紀の印支運動とジュラ-白亜紀の燕山運動)を受け、原岩の加水雲母が絹雲母に変化し、粘板岩と粘板岩状頁岩となっている。

硯石の主要構成鉱物は絹雲母で、85%以上を占め、カオリナイト5%以下、緑泥石1～3%、赤鉄鉱1～15%、石英・長石15%以下、その他電気石・金紅石・ジルコン・黄鉄鉱あわせて1%以

下である。絹雲母の粒径は 0.01 mm 以下、赤鉄鉱は 0.01 ~ 0.04 mm である。端溪石の色は紫を基調としている。青紫色については文献で触れていないが、 Fe^{2+} と Mg の多い絹雲母と思われる。 Fe^{2+} と Mg の少ない絹雲母を主とする部分は、淡黄緑 ~ 白色を呈する。赤鉄鉱が多くなると褐紫 ~ 褐紅色を呈する。硯石の比重は 2.8、孔隙率は 1 % 程度である。

硯石としての優れた性質、すなわち、墨の磨り心地と墨汁の状態が最高であるのは、絹雲母を主成分とする鉱物組成と組織によるものである。絹雲母の鱗片状結晶が定向配列して重なり、その微細結晶の縁が墨を下ろしているのである。絹雲母は、モース硬度 2 ~ 3 なので、磨墨の感触が柔らかい。固い鉱物粒子は少ない方がよく、最佳の部分は、赤鉄鉱 3 ~ 5 %、石英 1 ~ 2 % である。白色で透明感のある魚腦凍と称する石紋（石品）は、主に絹雲母からなっており、磨墨の感触がきわめてよい。氷紋は、裂隙を充填したもので、陳振中（1991）はこれを炭酸塩鉱物としているが、化学分析値は絹雲母を主とする珪酸塩鉱物であることを示している。

端溪の硯石には、しばしば石眼と称する石紋が見られる。直径 3 ~ 15 mm の球状体で、断面では同心円状構造を呈する。陳振中（1991）はこれを続成の過程で形成された結核体としているが、季明鈞（1990）は火山塵泥球（火山豆石）としている。わが国では、篠本（1916）が石蓮虫（海百合の一種）の化石と説明して以来、硯の愛好家には石蓮虫説が信じられている。劉演良（1988, 1994）と陳振中（1991）は、広東省地質鉱産局の端硯地質調査報告（1985）を引用して、坂東貫山（中国語訳：中国古硯と文芸）の石蓮虫説を否定している。この中国語訳の原文は示されていないが、石眼と石蓮虫については貫山夜話 29（1959）によっているようである。坂東貫山（1887-1966）は画家で、中国古硯の蒐集家として有名な人であるが、劉演良は彼を鉱石学者、陳振中は地質学者としている。これは、文献の孫引きによる誤りである。

IV. 現在の採掘状況

硯石層の分布地域は、羚羊峡を境にして東側の爛柯山付近と西側の北嶺、竜門山付近に分かれている。爛柯山付近は、西北麓の端溪地区と北麓の桃溪、沙浦地区に分けられる。爛柯山の西北麓と北嶺、竜門山地区は坑内掘りであるが、桃溪、沙浦地区では露天掘りが行われている。現在採掘中の有名硯坑は次の通りである。

爛柯山西北麓端溪地区：水岩、坑仔巖、麻子坑、朝天岩、緑端。

北嶺地区：宋坑、梅花坑、緑端。

竜門山地区：白綾岩。

桃溪、沙浦地区：低級の硯材を大量に露天採掘。各地区の中で最良質の硯石を産出するのは水岩で、次が坑仔巖、麻子坑である。水岩は西江のほとりにあり、坑仔巖の坑口は標高差で水岩の坑口の上 100 余 m にある。麻子坑は水岩の東南約 4 km の山腹にある。

1) 水岩（老坑）

水岩の硯石層は第 1 サイクルに属し、端溪の最良質の硯石が産出する。図 2 に示すように、硯石層の厚さ 40 ~ 60 cm で、その中の最良質部は、10 cm 以下である。

水岩は坑内湧水が多く、採掘は比較的排水しやすい秋冬の減水期に行われている。清代（1662 - 1911）には、斜坑内に作業員を 0.9 m 置きに配座して、かめに水を汲んで手渡しで送り、排水作業を行った。18 世紀には最深部までの人数は 80 人ほどで、日夜交代で 2 ヶ月余り水を汲み出して採石にかかったという。吳繩年（1753）は、採石中也 3 ~ 5 日置きに排水が必要としている。清代には約 18 回開採されているが、吳蘭修（1837）によれば、採石量が最も多かったのは嘉慶元年（1796）の開採で、水岩の深部の大西洞から 6000 塊余り、小西洞から約 1000 塊を採取している。仮に 1 塊の重さを平均 1.5 kg とすると、約 10 t 採取したことになる。

飯島（1935）によれば、民国 6 年（1917）にも開採されている。その後、半世紀を経て 1972 年に旧坑道を整備して採石が行われた。劉演良

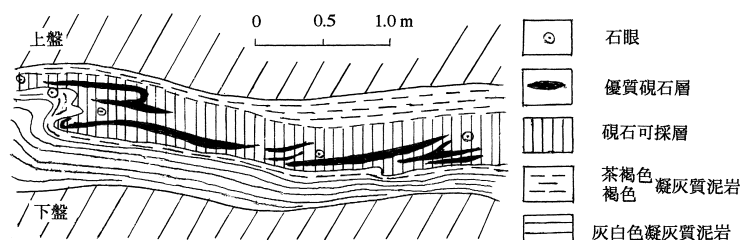


図 2 水岩の硯石層の模式図（季明鈞，1990 の原図に加筆）。

（1988，1994）によれば，水岩坑内の硯石層の走向はNW，傾斜 $10 \sim 30^{\circ}$ NE，厚さ $0.4 \sim 0.6$ m である。旧斜坑は沿層斜坑のため，曲折していたので，その後旧坑口の近くに新たな坑口をつけ，深部の切羽と直結する新斜坑（斜距離 98 m）を開鑿した。坑口と深部の採掘切羽との高低差は 20 数 m である。硯石は衝撃に弱いので，採掘に機械や発破を用いずに，のみとハンマーで採石している。現在でも採石の期間は秋冬の 3 ～ 5 カ月で，採石量は 6 t あまりであるが，硯に仕上がるものは 2 t 程度である。これらのうち，最優質のものは 30 ～ 40 面にすぎない。

2) 坑仔巖と麻子坑

坑仔巖は，清の後期に落盤があって閉じていたが，1977 年に新坑道が開鑿され，第 6 サイクルの硯石を採取している。麻子坑は清の乾隆年間（1736～1795）に開かれ，1962 年に新坑道を開鑿，第 7 サイクルの硯石を採掘している。

V. 宋の下岩と清の水岩

端溪石の採掘は唐代に始まり，宋代には多くの硯坑が開かれたが，最良質の硯石は下岩と呼ぶ硯坑から産出した。宋代の文献によると，下岩は 11 世紀には深く掘り進んで，湧水のため採掘が困難となり，12 世紀に入ってから採掘が中止されている。その後，300 年近く経って，明代に同じ下岩の名称で採掘された硯坑は，宋代の下岩と同一坑かどうか明らかではない。明末清初の文献に最良質の硯石を産する硯坑として，水岩という名称が現れ，水岩と宋の下岩の関係について議論が現在まで続いている。これは，開発史上の問題にとどまらず，下岩の古硯の鑑定と評価に関係するか

らである。下岩の古硯はきわめて高価で，古くから贋物が多いので，真贋の判定にはこれが基準の 1 つとなるのである。宋代の文献には，下岩は北壁と南壁に分かれており，とくに北壁の石がすぐれている，と記されているので，下岩の位置の解明，さらに両壁が一硯坑内にあるのか，別坑かということが問題となっている。

下岩と水岩の議論を大きく分けると，下岩是水岩と同一坑とする説，下岩と水岩は別坑とする説，下岩は複数坑で，水岩はその 1 つとする説の 3 つである。まず水岩付近の旧坑を文献に基づいて述べる。

1) 水岩（老坑）付近の旧坑

水岩付近にあった旧坑としては，飛鼠岩，廟尾，文殊坑，砂皮洞が知られている。

飛鼠岩：飛鼠岩の旧坑口は，水岩の坑口の北西側にあるが，これがいつ初めて開かれたかは不明である。何石卿（1830）と吳蘭修（1837）の水岩坑内図には，飛鼠岩是水岩の斜坑につながる 1 支洞として描かれているが（図 3），本文中では別坑扱いしている。高要県志（1826，1938）も飛鼠岩を別坑として扱っている。江藩の端研記は，飛鼠岩の洞内には，無数のこうもりが棲みついで（飛鼠岩の名の由来），採石作業ができないと記している。これは飛鼠岩の坑口近くには坑内水がないことを示している。水岩は夏期には坑口まで水が溢れていたため，両者の地下水位が同じであれば，飛鼠岩の坑口の方が高い所にあることになる。

廟尾：吳蘭修（1837）は，道光 12 年（1832）に土地の人が廟尾を開採し，石 600 kg を得たことを記している。廟尾是水岩の最も浅い所の支洞であるが，別の坑口から入ったようで，その坑口は

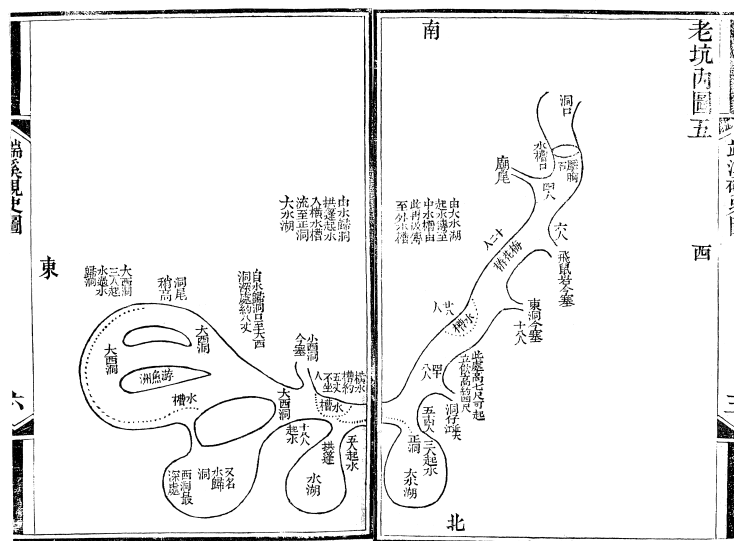


図 3 水岩坑内図（呉蘭修，1837「端溪硯史」）。

水岩の坑口の東側に隣接していたと考えられる。

文殊坑・砂皮洞：梅山周氏の硯坑志には、雍正元年（1723）に水岩の近くにある文殊坑・砂皮洞・飛鼠岩の3坑が開かれて入坑し、さらに同3年には水岩が開かれて入坑したことが記されている。文殊坑・砂皮洞の坑口の位置は、飛鼠岩の北の西江のほとりにあるとしているが、呉蘭修の端溪硯史（1837）の峽南諸坑図（図4）には水岩の南側に描かれている。飛鼠岩と廟尾の硯石層は水岩と同一層準であるが、文殊坑と砂皮洞の層準は不明である。

2) 下岩・水岩同一坑説

これは、下岩と水岩の議論の主流派で、飯島（1935）・劉演良（1988，1994）がその代表である。同一坑説では、宋代の代表的文献である端溪硯譜の次の記述が正しいかどうか問題となるのである。

「江のほとりより山に登りて行くこと3，4里にして硯岩がある。まず至るものを下岩という」：これについて飯島（1935）は、宋代の舟着場は明代以後のような端溪の流入点付近ではなく、ここより西江の下流または上流の地点ではなかったかとしている。しかし、5万分の1地形図を見ると、

上流側は地形がけわしく、通ることが難しい。下流側は桃溪まで舟をつけるのによい所がない。いずれにしても、重い石や生活物資・作業用品などをわざわざ3，4里（宋の1里は553m）も陸路運搬するとは考えられない。劉演良（1988）は、上陸地点が示されておらず、距離も不確かとしている。

「下岩には2つの坑口があり、中では通じて1穴となる。大なるものは硯を取りに入る所、小なるものは陳公密の開いた排水口である。北壁の硯石は湧水に浸り、溢れ出た水は下に流れて溪となる」：水岩の坑口は、西江の水面といくらも差がない所にある。このような低い所の坑口から水が溢れ出ている状景を、「下に流れて溪となる」と表現するかどうかである。どちらかという、高い所に排水口があったことを示すように思われる。

「下岩・上岩皆山の半ばにあり」：飯島（1935）は、この下岩は中岩の誤記であろうとしている。朱棟は硯小史（1798）の中で、下岩を中岩に置き換えて引用している。この記述は、同一坑説論者にとっては、無視するしかない部分である。

3) 下岩・水岩別坑説

この説の代表は呉蘭修の端溪硯史（1837）であ

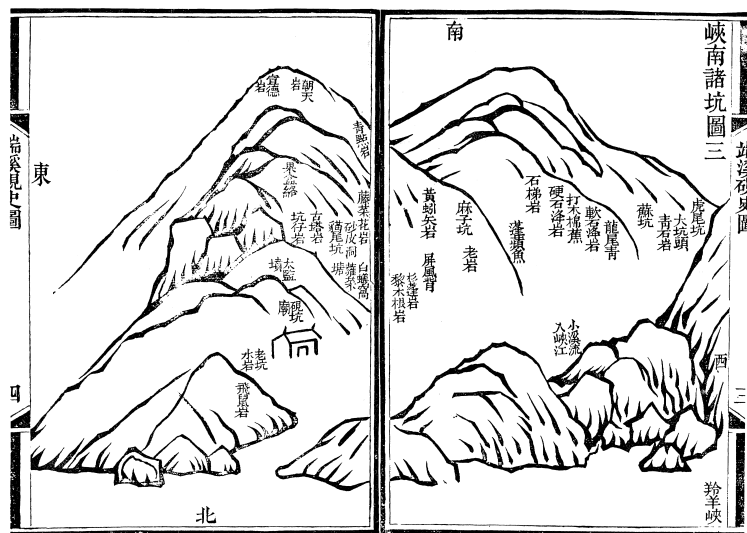


図 4 峡南諸坑図 (呉蘭修, 1837「端溪硯史」).

る。水岩が初めて開かれたのは、明の万暦 28 年 (1600) で、宋の下岩は坑仔巖であるとしている。わが国では、明治-大正期にこの本がよく読まれ、当時は別坑説の支持者が多く、主なる支持者は犬養木堂 (1916)、石川舜台 (1979: 稿了は 1914) である。呉蘭修 (1837) は、水岩の坑口の近くにある万暦 28 年の開坑石刻を根拠にしているが、次章に述べる明の崇禎 13 年 (1640) 刊の肇慶府志に、万暦 28 年開採の時には深い坑道に溜まっていた坑内水を汲み干して、採石したことが記述されている。従って、水岩の万暦 28 年初開説は成立しないことになる。

4) 下岩複数坑説

景日珍の硯坑述には、下岩は爛柯山の山脚にある諸坑の総称ではないかと記してある。小野 (1926) も、山腹以下の各坑を指したもので、水岩は下岩の中の 1 つであるとしている。最近、李遇春 (1991) は、複数坑説を詳しく論じ、宋の下岩は水岩、廟尾、飛鼠岩、坑仔巖の 4 坑で、水岩、廟尾、飛鼠岩は開採初期には各々が独立の硯坑であったと述べている。しかし、下岩の北壁と南壁については、飯島 (1935) の説、すなわち北壁は廟尾、南壁は飛鼠岩とする説に賛同している。

崇禎 13 年 (1640) 刊の肇慶府志の懷瑞統硯譜は、下岩複数坑説であるが、北壁・南壁については李遇春 (1991) とは大きく異なっている。これについては後で詳しく述べる。

VI. 地方志の硯石の記述

明・清代に地方政府が刊行した地方志としては、広東通志、肇慶府志、高要県志があり、これらには端溪の硯石の記述がある。

広東通志は、嘉靖 14 年 (1535)、嘉靖 37 年 (1558)、万暦 30 年 (1602)、康熙 19 年 (1680)、雍正 9 年 (1732)、道光 2 年 (1822) に刊行されているが、いずれも硯石については文献の収録が主で、当時の採掘状況の記述が含まれていない。

肇慶府志は、明の正統 5 年 (1440)、成化 9 年 (1473)、嘉靖 40 年 (1561)、万暦 16 年 (1588)、崇禎 13 年 (1640)、清の康熙 12 年 (1673)、乾隆 25 年 (1760)、道光 2 年 (1822)、光緒 2 年 (1876) に刊行されているが、万暦刊以前のものは日本にはない。崇禎刊の肇慶府志は、中国にも残っておらず、国立国会図書館にあるものが唯一という稀書である。その序文に崇禎 6 年とあり、刊行まで 7 年かかっている。万暦 28 年の水岩開採から約

30年後の記録であるので、史料としての価値は高いものと考えられる。

崇禎13年(1640)刊の肇慶府志は50巻、図1巻からなり、硯については巻10地理志3土産に記述がある。これには嘉靖刊肇慶府志の端溪硯石の記述、および続博物志はじめ宋代の文献7つが収められており、さらに区懷瑞の懷瑞統硯譜が載せられている。著者の区懷瑞は、肇慶府高明の人で、詩文に秀で、崇禎刊の肇慶府志50巻のうち、歴史、地理、文学の分野27巻を分担編集している。この懷瑞統硯譜の記述内容は、従来の下岩・水岩の議論とは大きく異なるものである。懷瑞統硯譜は、その後に刊行された肇慶府志では削られており、清代の硯の文献にも区懷瑞の名が消えている。

高要県志には、康熙12年(1673)、道光6年(1826)、民国27年(1938)の刊本がある。前述のように、康熙12年(1673)刊の肇慶府志には、懷瑞統硯譜が削られており、嘉靖志の要約が12行あるだけである。これは、同じ年に高要県志と肇慶府志の両方が刊行されたので、重複を避けるため、硯の記事は高要県志に載せたと思われる。康熙12年(1673)刊の高要県志には、巻5地理2土産の所に崇禎刊肇慶府志の硯の記述がほとんどそのまま収めてある(数力所誤字あり)。しかし、懷瑞統硯譜の見出しが削られ、また最後の4行目の「懷瑞……」以下が削ってあるため、この記述が誰のものなのか分からなくなっている。従って後々読者の目を引くことがなく、また崇禎刊の肇慶府志は、清初ほとんど失われ、一般の人には見ることが難しかったと思われる。その後の肇慶府志と高要県志には懷瑞統硯譜が消え、一般の硯の文献にも区懷瑞の名が全く見当たらない。康熙刊高要県志が懷瑞統硯譜の見出しを削った理由は不明であるが、新政府の清朝にとって、明末の府志の編集者は好ましからざる存在であったのかもしれない。しかし、高要県志の芸文には、区懷瑞の詩が十数篇収められ、詩人としての業績は残されている。

VII. 懷瑞統硯譜

崇禎13年(1640)刊の肇慶府志巻10にある懷

瑞統硯譜は、原本では70行、1190字である。この中に記されている爛柯山西北部の硯坑の名称は、下岩、中岩、上岩、朝天岩、屏風岩、竜岩である。下岩に関する部分を抄訳すると次の通りである。

「明代には、永楽・宣徳の時、中使(宮廷の使者)を遣わして採取し、万暦には中使の李鳳が採掘を行った。皆、勅命を受けて硯坑を開闢し、崖石に刻んでその歳月を記している。宋の硯坑の中では、下岩が第一である。下岩は常に水の下にあり、夏期には硯石を採取することができず、冬でも坑道には深く水が溜まっている。万暦の開採の時には、はねつるべをおいて次々と水を汲み上げて、坑内の水が涸れたが、いわゆる宋硯の下岩の採掘場所を指し示すことができなかった」：この記述では、水岩は万暦初開でないことが明らかである。

「坑内の深い水溜まりには、大小さまざまの石があり、大きいのは両手で抱えるほどのものから盆や鉢ぐらいのものもある。水に潜ってこれを探る」：沈徳符の万暦野獲編(1606)に、「万暦27年(1599)に珠池内臣李鳳が蛋人(広東福建の沿海にすむ1種族)に命じて、下岩に彼らの余技を試みた。皮袋で日夜水を汲み上げること久しくして、硯石を見ることができ、これを探った。そのうち水位がもどり、あやうく溺れかけたが、泳ぎもどって坑外に出た」と記している。これは懷瑞統硯譜と似た内容で、「余技」とは、潜水のことである。李鳳は真珠採取の監督官でもあったので、真珠貝採取の潜水の技にすぐれた人を率いて水岩で採石したと思われる。飯島(1935)は、万暦27年は予行採取で、この経験に基づいて翌28年本格的に採石を行い、記念の石刻を立てたものであろうとしている。

「下岩の水面から上に出ている所の南北壁を皆、中岩と呼んでいる。旧志(嘉靖刊肇慶府志)は北壁の石を上質としている。北壁は曲がりくねった険しい路が数里の所にあるが、南壁は甚だ近い所にある」：この記述は、明代の下岩と称する硯坑の位置を示す最も注目すべき箇所、議論を呼ぶ所でもある。

「北壁には石質の良いところが数箇所あり、土地

の人が場所を選んで穴を掘り、採石している…硯石はひび割れや虫食いが多く、時たま醇質・声色・気韻・眼ともに下岩と差異のないものがある…南壁の石は堅潤で北壁に類するが、割れ目や沙線が多い。清潤・気韻あり、こどもの肌のようなので、細かい砥石をかける必要がある。万暦の中使が採ったのはこの石である」：この北壁は坑仔巖を指すものと考えられ、南壁は水岩を指している。当時水岩は勅命により開閉されていたのに、南壁よりも上質とされる北壁を土地の人が採石していることは意外である。おそらく、北壁の本坑が崩落して再開不能となり、朝廷が採石権を放棄したので、土地の人が本坑口の側に新坑口をつけたものと思われる。吳蘭修（1837）は、「宋以前に開かれた硯坑のうち、今その処がわかるのは、いわゆる治平岩だけである。この坑は岩盤がくずれ、水が多く、久しく塞がっており、再開不可能であるが、その傍らにある坑仔巖では今も採取している」と記している。なお、坑仔巖（巖仔坑とも呼ぶ）の仔は、下岩または治平岩（治平坑）の仔という意味と思われる。

崇禎刊肇慶府志の巻2事紀2（区懷瑞の分担）に「万暦28年（1600）太監李鳳を遣わし、高明の銀鉞と広寧の金鉞を開採す。29年李鳳、高峽山に硯を採る。34年詔して、高明の銀鉞、広寧の金鉞、高要の硯坑を封閉す。採取は皆、利を失い、朝廷これを厭う」とあるが、この中に疑問点が2つある。すなわち、万暦29年と高峽山である。後の肇慶府志と高要県志には、28年と直されているので、開採年については単なる誤りかもしれないが、高峽山はそのままである。区懷瑞は巻8地理志で、高峽山は羚羊峽をはさんで爛柯山と対峙していると述べているので、下岩の位置を高峽山とする理由が分らない。ただし、道光2年（1882）刊の広東通志の高要県図には、羚羊峽の兩岸の山に高峽山と記入してあるので、兩岸の山を総称することがあったのかもしれない。

VIII. 王漁洋の北帰志と皇華紀聞

王士禎（1634-1711）、号は阮亭、別号漁洋山人、文章家・詩人として有名である。端溪硯に関する記述としては、皇華紀聞にある端溪石二則が知られているが、懷瑞続硯譜に関連して北帰志と皇華紀聞を調べるうちに、新たに次のことが明らかになった。

1) 北帰志に記された硯坑の石刻

王漁洋は、皇帝の命を受けて康熙24年（1685）2月広東に至り、南海神廟に祭告し、その後4月1日広州を発ち、肇慶に向かった。6日に羚羊峽を過ぎ、11日まで肇慶に滞在しており、その間、屈大均とも会っている。北帰志は4月1日以後の旅日記で、この中には硯坑の石刻についての重要な資料が含まれている。吳蘭修（1837）は、高兆の端溪硯石考（1689）に記された硯坑の石刻の存在を否定しているが、北帰志にはその石刻の存在を裏付ける次のような記述がある。

「11日に屈大均を送ってから、舟を用意して爛柯山の下の硯坑を訪れた。数箇所の硯坑は皆埋もれ塞がっていたが、ただ一坑の摩崖の刻字（岩壁に刻まれた文字）に『治平4年歲次丁未（1067）この古巖を重開す』とある。その文字の点画はまだ見分けることができる」：この石刻がどの硯坑にあったかは記されていないが、諸文献から治平坑（坑仔巖の側の旧坑）と考えられる。王漁洋は硯坑を見た後、舟で西江を下り、その夜は三水県に泊まっている。

道光6年（1826）刊の高要県志の金石畧には、高兆の端溪硯石考（1689）と粵東金石畧の硯坑題字が載っており、両者の字句に違いがあるのは、伝聞が異なっていたためとしている。粵東金石畧の字句は、北帰志と全く同じである。高兆が肇慶に遊んだのは康熙26年（1687）で、王漁洋が硯坑を訪れた2年後のことなので、まだ刻字は残っていたはずである。高兆の字句が北帰志と異なっているのは、自分の目で見たものではなく、やはり伝聞によったものであろう。吳蘭修（1837）は、各所の硯坑をひろく見てまわったが、高兆の記した石刻はどこにも見当たらないとしている。約

150 年後、呉蘭修が調べた時には、おそらく風化が進んで消滅していたものと思われる。呉蘭修の見解は今日まで広く受け入れられてきたが、治平 4 年の硯坑題字は北帰志によって実在が裏付けられたことになる。

2) 皇華紀聞の端溪石二則

皇華紀聞に収めてある端溪石二則は、懷瑞統硯譜と比較すると、その骨子はよく似ている。中央政府の高官の王漁洋は、肇慶滞在中に刊行 12 年後の高要県志を読む機会があり、これを著述の参考資料にしたと思われる。高要県志(1673)の硯坑の記述は無記名であったので、出典を示さずに自著の中に組み入れたものであろう。しかし、後人はこれを王漁洋の原文とみて、王漁洋曰く...として引用している(たとえば朱棟の硯小史)。小野(1925)は、端溪石二則の全文を紹介し、必ず一読して参考資料とすべきであるが、各坑の歴史と位置については賛成できないところもあるとしている。

IX. むすび

崇禎刊肇慶府志に収められている嘉靖 40 年(1561)刊肇慶府志の硯の記事によれば、永樂・宣徳の開採では良質の硯石があまり採れなかったようである。「永樂・宣徳中に内侍(宦官)を遣わして採取したが、莫大な費用を要するだけでなく、採った石も小さく砕けていて、硯に適しない。ついに岩穴を封塞して、今に至る」と記している。懷瑞統硯譜に記す万暦の開採でも、良石は採れていないようである。このように、勅命で開採した硯坑でさえ良質の硯石があまり得られなかったのである。良石が多く採れるようになったのは、清初に水岩の採掘坑道が深部に延びてからであろう。

区懷瑞の名は清初すでに端溪硯石の文献から消え、全く忘れ去られて今日に至ったが、懷瑞統硯譜は明代の端溪硯石の最も重要な文献と考えられる。その記述内容は、中国・日本における従来の下岩・水岩の議論を根底からゆさぶるほどのもので、大きな反響を呼ぶものと思われる。その史料としての評価については、中国の端溪硯坑史研究者の今後の検討にまつものである。

謝 辞

懷瑞統硯譜の難解な字句について、お教を賜った元吉林市教育局助教授 范鐘秀氏、同助教授 邊潤新氏、ならびに地質調査所重点研究協力員 林為人博士に厚く感謝の意を表する。

文 献

〔日本〕

- 坂東貫山(1959): 貫山夜話 29. 硯の見方 2. 日本美術工芸, No. 250, 61-63.
坂東貫山: 中国語訳, 中国古硯与文芸.(出版所, 年不明)
飯島 茂(1935): 硯墨新語. 雄山閣, 533p.
石川舜台(1979): 訳補端溪硯史. 二玄社, 217p.
犬養木堂(1916): 木堂翰墨談. 博文堂, 20p.
小野鐘山(1925): 端溪硯材文献考, 王漁洋端溪石二則. 書勢, 9, 28-30.
小野鐘山(1926): 端溪各坑論. 書勢, 10, 35-38.
篠本二郎(1916): 犬養木堂翁の交詢社に於ける硯と墨の講話を読み. 木堂翰墨談付録.
白野夏雲(1886): 硯材誌. 地質要報, 2, 234-283.

〔中国〕

- 陳振中(1991): 漫談端硯地質及天然石品問題. 紫石凝英, 広東省博物館・香港中文大学博物館, 140-144.
凌井生(1996): 老坑段—肇慶端硯石產出層位. 広東地質, 11, 3 期, 25-30.
広東省地質鉱産局(1985): 広東省肇慶市端硯地質調査報告.
広東省地質鉱産局(1995): 1:5 万肇慶市金渡鎮三水区域地質調査報告.
李明鈞(1990): 広東端硯石產地質及其成因機制探討. 広東地質, 5, 3 期, 88-95.
李遇春(1991): 重論“水巖与下巖”. 紫石凝英, 151-155.
劉演良(1988): 端溪硯. 北京文物出版社. 日本語訳新説端溪硯(広瀬保雄訳, 清雅堂, 1994, 188p.).
劉演良(1994): 端硯全書. 香港八竜書屋, 185p.
葉爾康(1991): 關於端硯優秀異性能之岩石礦物学原因. 紫石凝英, 137-147.

〔中国古文献, 地方志〕

- 肇慶府志: 崇禎 13 年(1640)刊, 康熙 12 年(1673)刊. 乾隆 25 年(1760), 道光 2 年(1822)刊, 光緒 2 年(1876)刊.
高要県志: 康熙 12 年(1673)刊, 道光 6 年(1826)刊, 民国 27 年(1938)刊.
広東通志: 嘉靖 14 年(1535)刊, 嘉靖 37 年(1558)刊, 万暦 30 年(1602)刊, 康熙 19 年(1680), 雍正 9 年(1732)刊, 道光 2 年(1822)刊.

〔中国古文献, 一般, 年代順〕

- 無名氏(宋): 端溪硯譜.
沈德符(1606): 万暦野獲編.
高兆(1689): 端溪硯石考.

王漁洋（清）：皇華紀聞．漁洋山人著述，卷 62；北歸志．
同卷 63．

景日畛（清）：硯坑述．

梅山周氏（清）：硯坑志．

吳繩年（1753）：端溪硯志．

朱棟（1798）：硯小史．

何石卿（1830）：宝硯堂硯弁．

吳蘭修（1837）：端溪硯史

江藩（清）：端硯記．

（2001 年 5 月 31 日受付，2001 年 7 月 23 日受理）